

---

# ファントム・ローズ

秋月あきら

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ファントム・ローズ

### 【Nコード】

N0189E

### 【作者名】

秋月あきら

### 【あらすじ】

学園で多発する失踪事件に巻き込まれた恋人を探すため、謎を追う涼の前に突如姿を現した薔薇を纏いし仮面の君ファントム・ローズ。夢幻に囚われた人々は何処に向かう……？そう、全ては想いの連鎖に引き起こされた現象。幻と現実の狭間に存在する者、それが私だ。

## ダブル「C a c e 1 失踪」

物語には必ず『はじまり』があると僕はそう信じている。

でも、一つの物語でも個人個人の『はじまり』はみんな違うんじゃないかって思う。

そして、終わり方もみんな違うと思う。

僕は明らかに違っていた。そして、今でも腑に落ちない。

もしかしたら、『物語』と同じで世界というものは一人一人に存在しているのかもしれない。少なくとも『あいつ』はそう言った。

これから話すのは僕の『はじまり』、それを覚えていて欲しい。

僕の名前は春日涼「カスガリヨウ」。僕が生まれた夏の日がやけに寒かったからそんな名前が付いたと聞かされている。

僕は私立六道学園高等部に通う二年生で、クラスでは平凡に過ごしてきたと思う。髪は染めてないから黒で、身長は一七四センチ、自分ではどこにでもいるような男だと思っているけど、人から見たら僕はどう映るんだろう？

そんな僕にも彼女がいる。同じクラスの椎名アスカ「シイナアスカ」。付き合いだしたのが中三の二学期だったから、付き合いって二年になる。

僕らはいつものように歩いて学校から帰宅していた。

「あのさ、また、誰かいなくなっただって」

横を歩くアスカを僕は不安な表情で見つめた。

「また、なんだ……怖いよね。わたしは涼がいなくなっちゃったらって考えると怖くて……」

同じ気持ちだった。僕も彼女がいなくなるのが怖い。でも、それもありえる話だ。

沈黙しながら曲がり角を曲がると、そこにはテレビカメラを構え

た男とマイクを持った女の人が立っていた。

事件の取材に来た報道陣だ。

「少し、お話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

マイクを向けられた僕はアスカの手を引っ張ってこの場から逃げた。学校から取材に答えるなど言われているけど、僕は事件のことを取材する報道陣が嫌だった。部外者に立ち入って欲しくない。

僕らが逃げると報道陣は追っては来ない。そのくらいの道徳心はあるんだと思う。

少し歩いたところでアスカが僕の顔を見つめた。

「あのね、昨日テレビ見てたら、うちのクラスの男子が事件のことしゃべってた」

「誰だよそいつ？」

「モザイクかかってて声も違ったけど、絶対あれは大崎くんだと思うんだ」

「つたく、あいつなに考えんだよ」

行方不明だけじゃなくて、人が死んでるっていうのに……。目立ちたがり屋の大崎が取材に答える映像が頭に浮かぶ。でも、そう言えば今朝あいつ、先生に呼び出されていた。たぶん取材に答えた件で呼び出されたんだと、今になって納得した。

今、学校では謎の失踪事件が流行っている。流行ってるという言い方は正しくないかもしれないけど、とにかく多発していることは確かだった。そのため、僕ら学生は多くの行動を規制されてしまっている。

最初のうちはただの家出だと思われ、いなくなる生徒の数が増えるに連れて、何か大きな事件に巻き込まれたのではないかという話になった。

消えた生徒は女子が多くて、優等生と言われていた生徒や将来有望と言われていた生徒ばかりが消えた。

僕が考え事をしてしていると、アスカが顔を覗き込んできた。

「大丈夫？」

「うん、ちよつと考え事」

「事件のこと？」

「帰って来ても亡くなってるから、みんな……」

それが怖い。それこそがこの事件の恐怖を一層あおるものだった。ある日突然、消えた生徒たちが数日経って帰って来た。その人たちが今までどこで何をしていたのか、事件に関してのことだけは彼らに聞いても答えがあやふやでまともな答えが返ってこなかった。けれど、そんなことよりも消えた人たちが帰って来たという事実の方が大事で、失踪事件は表面上はただの家出として扱われてしまった。

一時は生徒が帰って来たことによって平穏が訪れた。最初のうちは。

帰って来た生徒たちは時間が経つにつれて精神異常をきたしていき、やがては普通の生活ができなくなり、そして、みんな異常な突然死や自殺をしてしまった。もう、家出事件ではなくなった。

警察も動いているみたいだけど、捜査の方はあまり進んでいないらしい。まあ、それも仕方ないと思う。死亡した生徒たちはみんな証拠や証言から他殺された訳ではないっていう結論が出されている。

それで、結局死んだ生徒たちは世間一般に公表している情報ではストレスがどうかかってことになって未だ事件は闇の中。けれど、そんなことを生徒たちが信じられるはずもなく、学校を休んでいる生徒たちが急増してしまった。

最初はただの家出程度としか思っていないくて、自分とは無関係だと思っていた事件が、日を追うごとに大きくなっていき、最終的にはこんなにも大きな事件になってしまった。

そして、生徒たちがまた消えはじめている。まだ事件は近くにある。

不安な表情をしている僕に再びアスカが優しく声をあけてくれた。「怖いのはわたしも同じだけど、近くに涼がいてくれれば大丈夫だ

よ。それに内緒の話なんだけど」

そう言ってアスカは急に小声で話しはじめた。

「あのね、クラブ・ダブルB って知ってる？」

「いや、知らないけど、なにそれ？」

「簡単に言つと悩み事を話し合つて解決してくれるクラブかな。まだ、わたしは数回しか参加したことないけど、嘘みたいに悩み事が消えちゃつて、中には願い事を叶えてもらった人もいるんだよ」

「それってさあ、新興宗教みたいじゃない？　なんかそういうのって信用できないし、アスカには関わつて欲しくないないな」

「大丈夫だよ、放課後生徒で集まつて集会みたいのしてるだけだし生徒の集まりと聞いて少しは安心した気もしたが、やっぱり怪しげでアスカがそれに参加していると思うと不安でたまらない。」

「ねえ涼、明日の放課後わたしと一緒に行かない？」

「その　クラブ・ダブルB　に？」

「うん、放課後学校のある教室で集会があるの。それでね、明日わたし、やつと正式な会員にしてもらえるんだ」

「会員？」

「そう、クラブ・ダブルB　の正式会員は　ミラーズ　っていうんだよ。ミラーズ　になると、願い事を叶えてもらえるようになるの、ねっ、すごいでしょ？」

「あ、うん」

嬉しそうに話すアスカに何も言えなかった。

やがて、アスカの住むマンションが見えてきて、僕らは別れることになった。

「じゃあね涼！　また、明日。放課後空けといてね」

「うん、わかつた」

笑顔で手を振るアスカに僕も笑顔で返した。だが、この時はまだ、僕自身が事件の渦中に投げ込まれるなんて思つてもみなかつた。

この時すでに物語ははじまっていた。そう、これが僕の『はじめり』だった。

その日、僕はひとりで学校に登校した。アスカがいつもの待ち合わせの場所にいなかったからだ。

しばらく待ち合わせの場所で待ったのちに、ケータイで電話をしたがアスカに繋がらなかった。風邪でもひいたのだろうと、その時は思っ、僕はそのまま学校に登校することにした。だが、まさか学校であんな話を聞かされるなんて思っ、て見なかった。

「昨晚、うちのクラスの椎名アスカさんが突然姿を消してしまいました。心当たりのある人は私に連絡するように」

担任はそう言っ、て黙り込んだ。

教師も生徒も神経質になっ、ていて、できればこれ以上事件に巻き込まれたくない。しかし、たかが一日とは言え、姿を消した生徒を放っ、て置くこととどんな事件が起こるのか、考えただけでも頭が痛くなる。

僕にとっ、てアスカが姿を消したという事実は受け入れがたいものだった。

今日、放課後空けておいて言われたのに。そんな言葉を残したアスカがいなくなるはずがない。

昨日まで一緒に過っ、てきた人が消えるということに、最初は実感がわかなかっ、たけど、考えれば考えるほど僕の心は押しつぶされそうになる。

僕の心で渦巻くものはアスカを消えたという悲しみではなく、アスカが消えたという恐怖だった。

一日中アスカのことを考えていた僕は学校での出来事を覚えていない。授業で何をやったのか全く覚えていないし、誰と会っ、たり話したりしたかも覚えてない。唯一、覚えていることは報道陣に何を聞かれても話しをしてはいけないということだけ。

アスカは何処へ行っ、てしまったんだろう？

やっ、ぱり今、学校で起きている失踪事件と関係があるんだろうか？  
生きているのか？

死んでいるのか？

考えれば考えるほど、不安を募る一方で、何がなんだかわからなくなってくる。

そして、気づいたら僕は夕暮れの中をひとりで歩いていた。

いつの間にか学校は終わってしまっていたらしい。

いつもはアスカと一緒に帰ることが多い、この道。時にはひとりで帰ることもあったけど、それと今日は違う。

そういえば、最近は一とりで帰ることが多かったような気がする。もしかしたら、あの クラブ・ダブルB とかいうのにアスカが参加していたせいかもしれない。

重い足はいつに動かなくなり、僕はその場に立ち尽くしてしまっ

た。もう、歩くことさえも嫌になった。

頭が重く、クラクラと眩暈がする。気づけば辺りには知らない風景が広がっている。

薔薇の香りが僕の鼻を衝く。そう思った瞬間、視界が霞み、ひと気のない道路に人影が突然現れた。

道路の真ん中に『謎』って言葉が当てはまりすぎる人物がぽつんと立っている。その人物は黒いインバネスのような物を羽織り、腰よりも長い漆黒の髪を風に靡かせ、顔には白い仮面を付けていた。

僕は浮世離れし過ぎた相手の格好を見て戸惑いを覚え、変質者かなにかだと最初は思った。

けれど、そいつの髪が風に遊ばれるたびに、薔薇の香が辺りに振りまかれた。その香を嗅いでいるうちに、目の前に立っている奴がどんな奴だろうと、どうでもよくなってしまった。

仮面の奥から声が響いた。

「私の名前はファントム・ローズ」

ファントム・ローズの声は男か女わからない声をしていた。

僕が口を開くことを忘れてしているとファントム・ローズは話を続けた。

「君の彼女である椎名アスカを一刻も早く見つけたまえ、さもくば大変なことになる」

「あ、あ、あの……」

言葉が浮かばなかった。聞きたいことは山ほどあるはずなのに、それが頭に浮かばない。

わけもわからず僕はファントム・ローズを見つめるが、ファントム・ローズは何も語らなかつた。

そして、ファントム・ローズは一瞬にして姿を消した。それはまさに消失だった。

ファントム・ローズが消えた場所から薔薇の花びらが風に舞いながら空に上がっていった。

間の抜けた表情をして手を伸ばす格好をする僕はそのまま動けなかつた。目の前で起きた出来事が理解できない。人が目の前で消失してしまうなんて信じられない。

「何だったんだ今の？」

ようやく前に突き出した腕を下げた僕は息をついた。

見上げた空は朱色に染まっている。

僕が見た光景は幻影だったのか、いや、本当に幻だったのかもしれない。

薔薇の匂いが微かに残っている。

椎名アスカを探すこと、それが今の僕にできること。手を拱いて不安に駆られるのは嫌だ。

何が何でもアスカを僕の手で見つけなくていけない、そういう気がした。

## ダブル「C a c e 2 帰還

翌日、僕は学校でさっそく事件についての聞き込みをすることにした。

僕は人脈がある方ではないし、それに加えてみんな事件について話したगरなかつた。けれど、僕は粘り強くアスカの友達に話を聞いているうちに、あの名前が出てきた。

クラブ・ダブルB。

事件のことを聞いて回っているうちに、消えた生徒たちが何らかの悩みを抱えていて、クラブ・ダブルB について詳しく知りたがっていたことがわかつた。

放課後にどこかの教室に集まって活動しているらしい学校非公認のクラブ。

クラブ・ダブルB の正式会員は ミラーズ と呼ばれ、その人たちが生徒にクラブのことを普及させたり勧誘したりしているらしい。という噂しかわからなかつた。

クラブ・ダブルB については噂の範囲を出ず、友達に聞いたとか、友達の友達に聞いたとか、クラブ・ダブルB と関わっている人に行き当たることは結局なかつた。

僕の中にある、クラブ・ダブルB の有力な情報はアスカ本人が集会に出ているというところ。

いろいろと調べていくうちに、消えた生徒たちと、クラブ・ダブルB が無関係じゃないような気がしてきた。そして、クラブ・ダブルB を重点的に調べていくうちに、僕と同じように事件について調べている二人組みの女子生徒がいることがわかつた。

一人目の名前は椎風渚「シイナギナギサ」という一年生の女の子らしい。もうひとり話を聞いたのが一年生だったためだと思う、  
『あの、綺麗でクールそうな先輩』としかわからなかつた。

放課後になり、僕はすぐに椎風渚という子のクラスに行くことに

した。

教えてもらったクラスは103教室で、僕は廊下を走って向かった。急いで来た甲斐もあって、103教室の中では生徒たちが座って先生の話を聞いている。これなら先に帰られてしまう心配もない。廊下の壁に寄りかかりながら待っていると、103教室から生徒たちが流れ出て来た。

僕は生徒の流れに逆らって、狭い隙間を掻い潜りながら教室に入り、少し大きめの声で言った。

「椎風渚さんは居ますか？」

すると、数人の女子生徒たちが僕の顔を見てざわめき出した。

今まで席に座って友達と話していた女子生徒のひとりが急に立ち上がり、少し顔を紅くして僕の側に駆け寄って来た。

違和感のない茶髪をツインテールにして、楕円形のレンズの下側だけに銀色のフレームの付いた眼鏡をかけた小柄な女子生徒。その子は僕の前まで来ると、僕の制服についている校章の色を確かめながら言った。

「先輩ですよね……あたしに何か用ですか？」

うちの学校では校章の色で学年が分けられている。だから彼女は僕の校章を見て、僕が先輩であることを確認したんだと思う。

彼女の友達らしい人から野次が飛んで来た。

「渚、その人あんたの彼氏？」

「ち、違っつてば！」

この学校では普通、生徒たちは他学年の教室に行くことはあまりない。だから、たまに行くと言目を浴びてしまうし、それが異性の呼び出しだった場合は今みたいにからかわれてしまうことが多い。

椎風渚は僕の腕を掴んで走り出した。こういう行動をすると余計に疑われるような気もしたけど、僕は何の抵抗もせずに、彼女に引っ張られるままにどこかに連れて行かれようとしている。

そんな僕らの光景を見て、生徒たちが何かを言っている。聞き取れなかったけど内容は察しがつく。

椎風渚に引きずられるままに、僕は普段生徒たちにあまり使われることのない、学校の隅にある階段まで連れてこられた。

少し息を切らしている椎風渚が階段に座るのを見て、僕も何気なく彼女の横に腰を下ろした。

しばらく僕が椎風渚の顔を見てみると、彼女は息を整えて首を傾げながら口を開いた。

「え〜と、まず先輩の名前と用件、それからあ〜、好きなタイプの女性は？」

「えっ！？ 好きなタイプ？」

戸惑いの表情を浮かべた僕を見て椎風渚は少し吹き出して笑った。「ジョーダンですよ、先輩カッコよかったから、ちよつとからかっただけです。それからあたしのことは渚って呼んで下さい」

「ああ、うん、僕の名前は春日涼、消えた恋人を探してる。君が『事件』のことを調べてるって聞いたから……」

事件と聞いて渚はすぐに察しがついたらしく、消えそうな声で呟いた。

「あたしは友達が消えちゃって……」

何だから雰囲気が一気に暗くなって、沈黙がまるで黒い布のように僕らを包み込んでしまった。

渚をはじめて見て明るそうな子だなと思ったけど、今は二人で沈んでしまつて交わす言葉もない。

重々しい時間は長く感じられ、沈黙を破ってくれたのは渚のケータイの着信音だった。着信音の曲は今は流行のバンドの新曲だ。

渚はケータイのディスプレイ画面を見てから電話に出た。

「今ですか……物理室近くの階段です……はい、わかりました」ケータイを切った渚は笑顔を取り戻していて、僕の顔を見て元気な口調で話しかけてきた。

「あたしと一緒に事件を調べてくれてる先輩が今からここに来るそうです」

「ああ、うん」

渚と一緒に事件を調べている先輩。確か一年生が『あの、綺麗でクールそうな先輩』と言っていたから、僕と同じ、もしくは上の学年ということになる。

その『先輩』という人物が現れるまで、僕らはたわいのない会話でその場を繋いだ。

「春日先輩ってどこに住んでるんですか？」

「学校から徒歩一〇分くらいかな」

「結構近いんですね、あたしんちはバスと徒歩で三〇分くらいかかるんですよ。あ、そうだ、今度学校帰りに先輩んち遊びに行つていいですか？」

「えっ、うち？」

「ええ〜っ、だめですかあ？ だったらカラオケ行きましようよ、あたし歌には自信アリですよ」

「僕はあるまり得意じゃないかな……」

なんだか彼女に押され気味の会話だけど、沈黙するよりはよっぽどいいし、明るい口調で話しかけると、僕の顔にも自然と笑みが零れていた。

しばらく話していると、階段を足音がして、すぐに僕らの前にある人物が姿を現した。

凜とした態度で腕組みをしながら立っている女子生徒。僕はこいつのことを知っていた。僕と同じクラスの鳴海愛「ナルミマナ」だ。長身のスレンダーな身体の彼女は長い漆黒の髪と瞳を持ち、窓際でいつもひとりで本を読んでいた。頭はだいぶいらしく顔は美人系だが、口調は男性口調でいつも不機嫌そうな顔をしている。

僕はクラスで鳴海愛の隣席だったけど、口を聞いたことは一度もなく、彼女は人を寄せ付けない雰囲気を持っていて、クラスでも孤立した存在だった。

その彼女の方から僕に話しかけてきた。

「春日涼だったか？」

「そうだよ」

相手の態度が無愛想だったせい、僕も悪い態度で返事を返してしまっただけ。これでは喧嘩でもするみたいじゃないか。

鳴海愛は僕のことを不審の眼差しで上から見下ろしている。僕は鳴海愛となるべく視線を合わさないように下を向き、ふと横に座っている渚を見てある疑問が頭を過ぎった。

「二人ってどういう関係？」

この二人というか　鳴海愛にこの質問を試してみたかった。なぜなら、この二人が友達とは到底思えないからだ。いや、そもそも鳴海愛の友達がこの学校にいるなんてことが僕には考えられなかった。僕は鳴海愛の顔を見た。　答えたくないのか、めんどくさいのかわからないけど、彼女は口を開こうとはしなかった。

すると、僕の横で声がした。

「あたしたち、家が隣同士で昔から仲いいんですよ、ねえ愛ちゃん」  
「鳴海さんが『ちゃん』付けで……ぷっ」

こいつが『ちゃん』付けで呼ばれてるの聞いて僕は思わず吹き出してしまった。

鳴海愛に視線を向けると、彼女はどうでもいいって感じの表情をしていた。それを見た渚も思わず笑ってしまいながらこつこつ言った。  
「愛ちゃんあんな表情してるけど、実はチョー恥ずかしいんだよ、きつと……ぷっ」

渚は笑いがこみ上げて来るのを必死に口を押えてこらえた。

鳴海愛がこんなに弄ばれるのをはじめて見た。椎尻渚と鳴海愛は本当に親しい間柄なんだなと思った。

鳴海愛は少し顔を赤らめながらも、いつも通りの機嫌が悪そうな表情で話を変えようとした。

「事件について君はどのくらい知ってるんだ？」

こつこつ聞かれた僕は今まで調べたことなどを話して、渚たちが知らべたことなどを僕が聞いた。

クラブ・ダブルB が一種のオカルト集団らしいことが次第にわかってきた。神を信仰して儀式を執り行い、願いを叶えてもらう。

クラブ・ダブルBの正式会員である ミラーズ は神の使者で、悩み事を持っていて人々を助けて欲しい人の前に突然現れ、この学校のどこかにある教室に連れて行ってくれるらしい。そこで連れてこられた人は洗礼とかいうのを受けて ミラーズ になるらしい。そうすれば願いが叶い、悩み事など綺麗さっぱり忘れてしまいうらしい。

学校内でそんなことが行われているなんてとても信じられなかった。やっぱり噂は噂なのかもしれない。

それに ミラーズ って名前を知っていても、直接姿を見たっていう人は誰もいなかった。でも、アスカは……？

だけど、噂話が存在するということは、どこの誰が何の目的で噂を流したのだろうか？

話の最後まで僕の前で腕組みをして立っていた鳴海愛は窓から差し込む光を見た。

「すぐに暗くなる、もう帰ろう」

外はもう夕暮れに色に染まり、学校内にあまり生徒が残っていないことを確認した僕らは家に帰ることにした。

校門を出て、僕とは違う方向に歩き出す二人を見送ったあと、僕はひとりで家路に着いた。

日に日に沈む時間が早くなる太陽に背を向けて、僕はいつもの道を歩いていたらつもりだった。けれど、気がつくとも知らない場所だった。

いつの間にか辺りは静寂に包まれ、生き物の気配がすーっと消えたような気がした。

そして、またあの匂いがした。

薔薇の芳しい香り。この香りを嗅ぐと少し変な気分になる。

しばらくして、あいつがまた僕の前に突然現れた。

僕は声を出そうとしたが出なかった。いや、出したいと思わなかったから出なかった。

黒衣を纏う仮面の人物      ファントム・ローズ。

仮面の奥から声が聞こえた。

「椎名アスカが帰って来た」

それだけを言ってファントム・ローズは消えようとした。

「待て、話がある！」

急いでファントム・ローズを呼び止めようとした。けれど、ファントム・ローズ消える。

ファントム・ローズは空間にゆっくりと染み込むように消えながら呟いた。

「人間というには目に頼り過ぎている。君は目で見えないモノを『視る』ことはできるか？」

最後まで消えずに残っていた白い『仮面』が不適な笑みを浮かべたような気がした。そして、ファントム・ローズは消失した。

薔薇の香りが辺りに微かに残る。

ふと我に返った僕の頭であの言葉が再生される。『椎名アスカが帰って来た』 その言葉は忘れていない。だけど、ファントム・ローズの声は今聞いたばかりだというのに漠然としか覚えていない。男か女の声かすら思い出せなかった。

それにこんな不可思議な現象を普通のこととして受け止めてしまっていた自分に気付いた。なぜだろうか？

夕日を背にして僕は急いでアスカの住むマンションに向かった。

エレベーターで九階まで登り、アスカの家に着いた僕はインターフォンを意味もなく力強く押ししてしまった。

インターフォンから女性の声が聞こえた。アスカの母親の声だ。

《どちら様でしょうか？》

「あの、春日ですけど、アスカさんが帰って来たって本当ですか？」

《……………》  
何かすごく長い間があり、僕は玄関の前で心臓が弾けてしまいそうだった。

ゆっくりと玄関のドアが開かれる。そのドアを開けたのは他でも

ない、アスカ本人だった。

本当はこの時、もうアスカがどこにも行かないように強く強く抱きしめて放したくないと思った。でも、恥ずかしさが勝って結局僕はアスカのことを抱きしめられなかった。

アスカの部屋へと通された僕はカーペットの上に適当に腰を下ろした。腰を下ろしたというよりは安堵感で腰が抜けたという感じだったかもしれない。

部屋のドアを閉めた終えたアスカが目には涙を浮かべて僕を強く抱きしめた。

僕は突然のことに驚き、間抜けな顔をしてアスカの顔を凝視してしまった。

アスカは涙を流しながらも柔らかい笑顔を浮かべていた。僕はこの笑顔を中心に消えないように強く焼き付けて大切にしようと誓った。アスカの唇が静かに動いた。

「涼に会いたかった」

その言葉を聞いた僕はとにかくアスカのことを強く抱きしめた。アスカが消えないように……。もう二度と離さない。

それから僕らはしばらくそのままの格好のままだった。

どれくらいの間が経ったか覚えていないけど、いつの間にか僕は離して会話をしていた。

「アスカが帰って来てくれてよかった」

他の失踪した生徒たちは少なくとも三日は帰ってこなかった。アスカはそれに比べて早く帰ってきた。そう考えると、多発している失踪事件とアスカは関わりがないのではないかと、安堵感が湧いてくる。

しかし、アスカの表情は暗かった。

「覚えていないの、学校からの帰りに涼と別れてから記憶があやふやなの」

僕の気分は酷く重くなった。これでは今までの例と同じじゃないか。

恐る恐る僕は事件のことをアスカに尋ねた。

「アスカは自分でどこかに行ったの？ それとも誰かにさらわれたとか？」

アスカは何とも言えない表情をした。

「わからないの、涼と別れてから……家に帰ろうと思ったんだけど、何かを思い出して学校に戻ったような気がするんだけど……」

僕はアスカの口から出る言葉一つ一つを熱心に暗記していくように聞き入った。

アスカの表情は明らかに曇っていた。何かを思い出したくても思い出せないような感じだ。

「それで、気付いたら家の前にいて……それで、家のドアを開けて中に入ったらお母さんがすごい顔して飛び出して来て、どこに行っていたのかと聞かれて、そこでわたしが二日近くも自分が家に帰ってなかったことを知ったの」

「二日間のこと、本当に何も覚えてないの？」

アスカは僕の瞳を見つめたまま軽く頷いた。

「何も……、さっきまで警察の人が来ているいる聞かれたんだけど、わたし何も答えられなくて……」

悲しそうで苦しそうで、どんどん表情が暗くなっていくアスカを見ていたら、僕は何だかアスカに対してすごく酷いことをしてるんじゃないかって気になっていて、気付くと僕はアスカに意味もなく謝ってしまった。

「ごめん、何かごめん」

「何で涼が謝るの？」

「何か謝んなきゃいけないと思った」

アスカは不思議そうな顔をして僕を見つめて笑った。

「涼のそういうところ好きだよ」

その言葉を聞いた僕の体温は一気に急上昇した。

その場に居るのが恥ずかしくなって、時計を見ると時間もだいぶ遅くなっていたので、その勢いで家に帰ることにした。

「帰るよ、何かずつとここにいるの悪いような気がするから」

「うん、じゃあね」

「明日迎えに来るから一緒に学校行こう」

アスカは小さく頷いた。その顔は少し悲しそうというか寂しそうだった。

僕は一瞬ためらったが部屋の外に出た。

アスカの父親は今海外に出張中なので、僕はアスカの母親だけに軽くあいさつをするとアスカの家を後にした。

早歩きでマンションを出ると辺りは薄暗かった。

風が少し冷たく、空には星が瞬きはじめている。

道路を照らす蛍光灯が突然チカチカと点滅しはじめて、あいつが薔薇の香りとともに再び現れた。

僕には『仮面』が少し不満そうな表情をしているように見えた。

仮面がそんな表情をするはずもないのだけれど、僕はそれを見て腹が立って、意味もなくこいつを怒鳴りつけてしまった。

「今度は何の用だよ！」

ファントム・ローズは仮面を付けているせいか全く動じる様子が見えない。

「君はまだ事件について調べる気はあるのか？」

「アスカが帰って来たからもういいよ」

「それは要するに自分はもう無関係ということか？」

「そうだよ」

僕は確かに見た『仮面』が不適な笑みを浮かべたのを。

「この物語は終わっていない。君は好きな道を選ぶといい。しかし、自分の人生の選択権は自分になんか多い。それを覚えて起きたまえ」

そう言ってファントム・ローズはまたも消えた。

ファントム・ローズいた場所には薔薇の香と花びらが残っていた。

## ダブル「C a c e 3 死」

翌日の朝、僕はアスカを迎えに彼女の住むマンションに向かった。アスカは僕のことをマンションの入り口で待っていてくれた。そして、僕が彼女に近づくと、うれしそうな顔をして駆け寄って来た。

「おはよ、涼」

「おはよ」

アスカが僕の顔を下から覗き込む。

「どうしたの涼？ 目の下くまできてるよ」

「ちよつと寝不足で」

実はちよつとどころじゃなかった。

全部ファントム・ローズのせいだ。あいつが変なことを言うから、僕はあの言葉とあの不適な笑みが頭から離れなくてほとんど一睡もできなかった。

「大丈夫、涼？」

「あ、うん」

「本当に？」

「本当だよ」

嘘だった。僕はアスカに嘘付いた。はつきり言って平気じゃない。心身ともにどつと疲れていて、本当は学校なんか行きたくなかった。それでも僕はアスカと一緒に学校に向かった。

たわいのない話をしてたら何時の間にか僕らは学校に着いていて、気付いたときには教室にいた。前を同じ日常が戻ってきたような気がした。

教室に入った途端、アスカは女友達に連れて行かれてしまった。

僕は自分の席に付いてアスカたちの話に聞き耳を立てた。

みんなアスカのことを心配して『どうしたの？』とか、『だいいじよぶだった』とか、『心配したんだから』とか口々に言っている。

みんなアスカのことを本気で心配していたようだった。でも、もう

心配することはない、アスカは帰ってきたのだから。

僕がアスカたちの話に聞き耳を立てていると、僕の前に鳴海愛が現れた。

「椎名帰って来たんだな」

「ああ」

「私たちが探してた相手も帰って来た」

「良かったじゃん」

鳴海愛は腕組みをして少し沈黙を置いたあと言った。

「私と渚はまだ事件について調べるが、春日はどうする？」

「僕はもういいよ、アスカが帰って来たし」

鳴海愛はいつも以上に不機嫌な顔をした。

「帰って来た生徒たちが、その後どうなったか知ってるだろ」

この言葉を聞いた僕はすぐお腹が立って嫌な顔をして鳴海を睨みつけた。

「あれ見ろよ、そんなことあるわけないだろ！」

僕はアスカのことを指差した。しかし、鳴海愛は僕のことを鋭い目つきで睨みつけた。

「確かにみんな最初は普通だった、でも……」

『でも、みんな死んだ』って言いたいんだと思う。でも、鳴海愛はそれ以上何も言わないで自分の席に戻って行った。その姿は重たい影を背負っているように見えた。

僕もわかっている。でも、そんなこと考えたくもない。そんなことあるわけないじゃないか。

やがて授業がはじまったが、僕は授業どころじゃない。あのファントム・ローズも鳴海愛も僕が考えないようにしていることを言うてくる。

不安で堪らない。また、アスカがいなくなってしまうなんて考えたくもない。けど、どうしても考えってしまう。

悶々と考え事をしているうちに学校はいつの間にか終わってしまった。

僕は一目散にアスカの手を引いて帰宅した。もう、絶対離さない。帰り道、アスカは僕のことを心配そうな顔をして見つめていた。けれど、僕は口を開かなかった。

もう、何がなんだかわからない。

本当は僕がアスカのことを心配しなきゃいけないのに心配されてしまっている。けれど、アスカのことを心配するってことは、まるでアスカに何かが起こるようじゃないか。

悪いことは考えちゃいけない。アスカはすぐそこにいる。アスカはずっと僕の側にいるんだから、心配することなんてないじゃないか。

僕は僕に言い聞かせようとするが、どうしても不安が消えない。次第に腹が立ってきて、怒鳴り散らしたい気分になってきた。

過ぎ去って行く風景。時間が進んでしまうのが怖い。今ここで時間が止まってしまえば、永遠にアスカと一緒にいられるのに……。

「涼っ！」

少し大きな声で呼ばれて僕ははっとした。

僕の腕は後ろに引かれ、その先ではアスカが少し怒った表情を浮かべていた。

「もお、家に着いちゃったよ」

「えっ!？」

気がつくと、もうそこはアスカのマンションの前だった。

顔を紅くしていたアスカの表情が和らぎ、彼女は元気よく僕に手を振った。

「じゃあね、涼、また明日！」

「じゃあ」

僕は軽く右手を上げた。

アスカが僕に眩しい笑顔を見せてくれた。そして、だんだんと姿が小さくなって行く。

次の日、僕は学校を寝坊で遅刻した。今まで溜まっていたモノが

一気に来たんだと思う。

二時間目の英語の時間が終わる頃、僕は教室の後ろのドアから静かに入った。

みんなの視線が僕に集まった。僕は遅刻なんて滅多にしないのでちよつと恥ずかしかった。

ネイティブアメリカンの英語教師に席に早く着くようにと言われて席に着き、授業の準備をしながら何気にも後ろの方の席を見た。

僕は『あれっ?』と思った。

アスカの姿がない。学校を休んだらどうか?

休み時間になり、僕は友達にアスカのことを聞くと、やっぱり学校を休んでいるらしい。しかも学校に無断で欠席をしているらしく、先生がアスカが何で学校を休んでいるのかを生徒にしつこく尋ねたらしい。あの事件の後だから先生たちも気が気じゃないんだと思う。僕は不安な気持ちになった。そして、すぐにアスカのケータイに電話をかけてみたが繋がらない。メールも送ってみたが返事は返ってこなかった。

僕の不安は大きくなっていく。もしかしたら、アスカに何かあったのかもしれない。

恐れていたことが現実になったかもしれない。

今日もアスカに会えることを信じていた。けれど、それは見事に打ち砕かれた。

その後、僕は全く授業に集中できなかった。そして、時間がどんどん過ぎていき、四時間目の終わりのチャイムが鳴り、昼休みになった。

僕はどうにかして早退できないかと、ずっと考えていた。

保健室に行つて、病気のフリをしようと考えたりしたが、僕は結局無断で早退することにした。

僕は荷持つを教室に置きっ放しにして、何食わぬ顔をして、下駄箱まで行き靴を取った。

昼休みは外に無断で食事に行く生徒が多いため、たまに校門で先

生が目を光らせて立っていることがある。まさにここ数日はそれだった。

僕がどうしようかと下駄箱で悩んでいると、後ろから突然声をかけられた。

「私も行く」

僕は心臓を直接握られたくらいドキッとしてしまった。だけど、後ろに居たのが先生じゃなくて鳴海愛だったことを確認した僕はほっと胸を撫で下ろした。

「どうして鳴海さんがここに？」

「椎名の家に行くんだろ、だったら私もいつしよに行く」

「別にいいけど、学校サボって平気なの？」

僕はこの質問をした後にそれが愚問だったことを後悔した。

鳴海愛は成績こそ良いものの、学校での生活態度は悪い。無断欠席・無断早退はよくするし、一度だけ彼女が先生と激しい言い争いをしているのを僕は見たことがある。

でも、鳴海愛の成績は学年でトップだし、テストはいつも満点を取っていた。

うちの学校ではテストが終わるたびに成績の良い上位一〇名の名前が廊下に張り出される。だから学年のみんなは鳴海愛が頭がいいことを知っていたし、先生ならもちろん知らないハズがない。それに彼女は授業はよく欠席するけどギリギリ進級できるよう考えて欠席しているようだった。だから、結局先生たちはあまり強く出ることができないみだった。

鳴海愛が自分の下駄箱から靴を取り出している所に僕は声をかけた。

「先生たちが見張ってるけど、どうやって外に出る？」

「この学校に熱血教師なんていないから大丈夫だ」

「はあ？ どういうこと？」

「あいつらはどうせ校門に立ってるだけで、他の所なんて見回りもしない。柵を越えて外に出ているよみんな」

そう言っただけで歩きだした鳴海愛のあとを僕は付いて行った。

僕は適当な所から、校舎の外に出て、そして柵を登った。

鳴海は意とも簡単に柵を登って外に出た。それを見た僕は慣れているんだな、と思った。

今になって鳴海愛への興味が湧いてくる。他の生徒たちを逸脱する彼女は僕らとは根本的に違う。彼女が何をしようと思えば驚かないと思う。

学校の外に出た僕らは迷うことなく一直線にアスカの家に向かった。

アスカの住むマンションは学校から歩いて数分の距離にある九階建てのマンションで、アスカの部屋は角部屋の901号室だった。

アスカの家の前まで来た僕はインターフォンを押した。しかし、少し待っても何の反応もない。それが僕の不安を駆り立てる。

そして、鳴海がインターフォンを押した。でも、やっぱり反応がない。

鳴海はもう一度インターフォンを押した。すると今度はすぐにインターフォンから声が返って来た。

《どちら様でしょうか？》

アスカの母親の声だった。だけど、その声はすごく疲れているというか、何かに怯えているように聴こえた。

「アスカさんと同じクラスの鳴海と申します。アスカさんはご在宅でしょうか？」

玄関のドアが開きアスカの母親が現われた。

「アスカに何の用でしょうか？」

そう言うアスカの母親の顔は蒼ざめているように見えた。

鳴海は玄関に足を一歩踏み入れてから返事を返した。

「今日から、一週間の間学校の授業が午前中で終わるといふ連絡と、アスカさんが学校を『無断』で欠席したので担任の先生に様子を見てくるように頼まれました」

今の鳴海は完璧な『優等生さん』だった。嘘が嘘と全く感じられ

ない。

「二人ともわざわざありがとうね。アスカ、昨日の夜から高熱を出しちゃって、ずっと看病していて学校に連絡するの忘れてたわ」

鋭い眼差しをアスカの母親に向けた鳴海が突然とんでもないことを口走った。

「本当ですか？」

その言葉にアスカの母親は突然恐怖の形相をして鳴海のことをドアの外に押し出そうとした。だが、鳴海は逆にアスカの母親を押し倒して部屋の中に入った。

「アスカの部屋はどこだ？」

「そっちだ！」

僕はアスカの部屋を教えつつ鳴海の後を追った。

鳴海が部屋のドアの前で足を止めた。そして、ドアを力いっぱい激しく開けた。

部屋の奥にいたアスカがカーペットにへたり込みながら、僕らを指差して嗤っている。その光景を見た僕は背筋が凍った。僕はアスカに人間の狂気を見てしまった。

「りょうちゃん、まなちゃん、こんにちわあ」

アスカは幼児のようなしゃべり方をして、手を伸ばしながら床に平伏すように頭を下げて、勢いよく髪の毛を振り乱しながら頭を上げたあとに壊れた嗤いを発した。

この場にアスカの母親が目から涙をぼろぼろと落としながら、取り乱したようすで現われた

「今日の朝からずっとここで、お父さんは明日にはやっと帰って来れるって言ってたけど、私どうしたらいいかわからなくて」

そう言ってアスカの母親は床にへたり込んだ。

僕はアスカに駆け寄って、肩を思いっきり掴み揺さぶった。

「アスカ、どうしたんだ！？」

アスカは僕と目を合わせようとしない。いや、違う僕のことなんてお構いなしで頭を揺らしながら天上を仰いでいた。

そして、アスカは僕の瞳を愛くるしい瞳で見つめ、突然僕を押し倒して身体を覆い被せ、僕の唇と自分の唇を重ね合わせて舌を口にねじ込んで来た。

僕は突然のことに驚き、アスカの身体を突き飛ばした。

アスカは僕のことを哀しそうな眼で見た。

「りょうちゃんはアスカのこと、きらいなの？」

そう言っつて、アスカはどこから取り出したカッターナイフで自分の手首を切った。

その光景を見たアスカの母親は叫び、僕は言葉を失った。

この場で唯一冷静でいたのは鳴海愛だった。

「大丈夫だ、人間は普通に手首を切ったくらいじゃ死ねない」

鳴海は続けてアスカの母親に向かって言った。

「警察と病院に連絡します」

鳴海はアスカの母親の返事を聞かずにすぐに自分のケータイを取り出し、警察と病院に迅速に電話をかけた。

そして、呆然としている僕を邪魔だと言わんばかりに押し退けて、アスカの腕の怪我の応急手当をしようとしたのだが、アスカは鳴海の身体を思いつきり押し倒した。

鳴海が予想だにできなかった攻撃を受けて床に尻もちを付いた隙を狙ってアスカは開いていた窓から身を乗り出し、大声を出して嗤いながら、空に羽ばたいた。

羽ばたく寸前、アスカは僕のことをちらっと見て哀しそうな笑みを浮かべていた。

時間が止まり、僕の耳から音が消えた。

衝撃のあまり声すら出せなかった、現実かどうかすら認識できない、幻の中で起きたことのようなのだ。

鳴海はすぐに窓の外を見下げて、厳しい表情をするところはつきり言った。

「助かる見込みは『絶対はない』」

その言葉は僕の耳には届かなかった。

数分後、ものすごいサイレンの音を立てながら警察と救急隊員が駆けつけて、事故現場は立ち入り禁止となり、事故と関わった僕ら三人は警察の取り調べを受けた。

僕とアスカの母親は何かを話せる状態じゃなかった。だから鳴海が警察と話をして、僕はただ頷いているだけだった。そのため、ちやんとした取り調べは後日改めて行われることとなった。

しばらくして僕の母親が僕の身柄を引き取りに来た。鳴海の両親は二人とも海外にいて、彼女は一人暮らしをしているために引き取りに来る人がいないらしい。

僕は母親に付き添われながら、幻の中を歩いているようだった。でも、マンションを出た途端に僕は現実の世界に還った。そして、母親の静止を振り切って無我夢中で走り出した。

とにかく、全てから逃げたかった。  
恐ろしいことが起きた。

周りに建物がどんどん後ろに流れて行き、自分がどこにいるのかもわからない。

アスカは自分の前で死んだというのに僕は何もできなくて……。ただ、見てることしかできなくて、悔しくて、哀しくて、どうしようもなく……。僕は大切なものを失った。

胸が苦しくて、吐き気がする。嗚咽が止まらない。  
頭がクラクラして、薔薇の香が風に乗ってやって来た。

辺りには誰もいない。そして、あいつはまた僕の目の前に現れた。僕の気持ちがいかにそうさせているのかもしれないけど、ファントム・ローズの『仮面』は哀しそうな顔をしているように見える。

ファントム・ローズの声は静かに言った。

「過ぎたことならばいつでも考えることができる。しかし、人間は未来を生きる者だ。未来は過ぎてしまつては未来ではない、今考えるべき未来のことを考えたまえ。そうしなくてはまた過去に悩ませれる」

今の僕には何かを考える気力なんて少しもない。過ぎ去った過去のことには押し潰されそうだ。

これから僕に何をしろっていうんだ。自分が無力なことを思い知らされた。僕には何もできない。

ファントム・ローズの言った次の言葉に僕は自分の耳を疑った。

「還つて来れるかはわからないが、椎名アスカはまだ生きていると思われる」

「アスカが生きてる！？ 莫迦言うなアスカは僕の目の前で飛び降りたんだ！！」

「真実を知りたいのなら自分で調べるといい。自分の真実は自分しか見つけられない、それは最終的に判断を下すのは自分自信だからだ」

そう言ったファントム・ローズの身体がその形を維持したまま全て薔薇の花びらに入れ替わり、上空に渦を巻きながら飛翔して行った。

ものすごい薔薇の香が辺りに立ち込めた。

僕は少し落ち着きを取り戻し、そして、改めて決意した。事件の謎と真実は僕の目で見極めると。

なぜだかわからないけど、ファントム・ローズの言う通りアスカが生きているような気がする。そう願いたいだけかもしれないけど、少しでも希望があるならそれにすがりたい。

このまま家に帰るべきか迷った。けれど、これ以上両親に心配させるのもよくないと思った。

学校を無断で欠席して、結果的にあんなことになってしまった。

明日から僕も先生に目を付けられてしまうだろう。

明日学校に行くべきだろうか？

学校に行つて鳴海に会わなきゃいけない。彼女なら僕の力になってくれるに違いない。そういえば、彼女のケータイ番号聞いてなかった、失敗したな。

ゆっくり、歩きながら僕は事件を一から整理してみたけど、結局

どれも確証がない。

そもそも消えた生徒たちは全員無関係で自発的に姿を消したのか  
もしれないし、全部ただの偶然だったのかもしれない。

でも、僕にはそうとは考えられない。「消えた人たち」・クラ  
ブ・ダブルB・ミラーズ、そして、ファントム・ローズ。全  
ては繋がっていると僕は思う。そう考えてしまうのが普通だと思っ  
た。そんなことを考えていたら、知ってる道に辿り着いた。家はもう  
すぐだ。

自宅の前には母親が立っていた。母親は心配が張り裂けてしまっ  
たような顔をして、僕を出迎えた。

両親は僕に何も言わなかった。言えなかったのかもしれない。  
家族に会話はなかった。無言で夕食を取り、誰もしゃべろうとは  
しなかった。そして、時間だけが過ぎていった。

夜の深さが増し僕はベッドに入り、目を閉じた。  
暗闇が僕の心と身体を蝕んで行くような感じに囚われながら、僕  
は深い闇の中へ堕ちて行った……。

## ダブル「C a c e 4 追跡」

次の日、僕は学校に着くとすぐに鳴海愛を探した。

彼女はいつも通り、僕よりも早く学校にいて、席に座って『多重世界』なんて名前の本を読んでいた。

彼女は僕に気付くと声をかけて来た。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

鳴海は僕のことを『それで用件は何だ？』といった感じで、本から目を覗かせるように見た。僕はなぜだか慌ててしまっただけで、返事を返した。

「事件についてまた調べようと思って……」

「昼休みに渚と会うから、君も来るといい」

そう言っただけで鳴海は本に目を戻した。

気付くと周りの人たちが僕らのことをちらちら見ていた。僕が鳴海愛と話しているのが珍しいのか、鳴海愛がクラスの人としゃべっているのが珍しいのか、どちらかだと思っただけ。ちょっと前までは僕もそうだったからわかる。

僕は何食わぬ顔をしながら自分の席に着いた。

前だったら僕も鳴海愛がクラスの人としゃべっているのを物珍しく見てしまったかもしれない。でも、今は違う。鳴海愛のイメージは僕の中でだいぶ変わっていた。

昼休みになり、僕は鳴海に連れられて屋上に連れて行かれた。

屋上は昼休みになると、ここで昼食を取ろうとする生徒の姿をばちばち見かける。その中の一人に椎風渚を見つけた。

床に座っている渚はニコニコしながら僕らを手招きしている。僕はそれに答えて軽く右手を上げた。

それに答えてか、渚はより一層の笑みを浮かべた。

「春日先輩こんにちわ」

「こんにちわ」

僕は相手の元気の良さに少し押されぎみにあいさつを返した。

渚はすでに一人でお弁当を食べていた。そのお弁当が手作りのお弁当で見栄えも綺麗だったので僕は聞いて見た。

「これ、渚が作ったの？」

「はいそうですよお、あたし料理得意なんです」

「ふ〜ん、いいねえ。僕はこれだよ」

と言つて僕は地面に腰を下ろしながらコンビニの袋からおにぎりを二つとペットボトルに入った清涼飲料水を取り出して少し苦笑いをした。

それを見た渚が笑みを浮かべる。

「じゃあ明日、あたしが先輩のお弁当作って来てあげましょうか？」

僕は笑顔を浮かべて快くその申し出を受け取った。

「ありがとう、楽しみにしてるよ」

渚はうれしそうに顔して腕を捲るようなポーズをした。

「任せて下さい、腕によりをかけてたくさん作って来ますからね」

僕は笑いながら鳴海のことをチラッと見て言った。

「あれ、鳴海さんはお弁当食べないの？」

「昼は食べない」

スタイルとかを気にして食べないのかなと思ったけど、本当はどうなんだろう？

「どうして食べないの？」

「食べる理由がないから」

「はあ？」

僕は思わず首を傾げてしまった。『食べる理由がない』、お腹が空いてないってことなのか？

僕らの会話を聞いていた渚が、口にいっぱいに詰めていたご飯をぐくんと一気に飲み込んでから、横から口を出してきた。

「愛ちゃん、ダイエットでもしてるの？」

「いや」

それもそうだ、鳴海の身長は僕と同じかちょっと下くらいで足がスラっとしていてやけに長い、別にこれならダイエットしなくていいと思う。

渚は口に手を当ててもぐもぐしながら、何かをしゃべろうとした。「愛……どう……うぐう……げほっ」

食べものを喉に詰らせた渚の背中を鳴海が擦り、僕は未開封だったペットボトルの蓋を開けて彼女に差し出した。

渚はそれを受け取ると、五〇〇ミリリットルを一気に飲み干して、『はあはあ』と肩で息をした。そして一言。

「死ぬかと思つたあ〜」

その光景を見た僕は思わず笑ってしまった、横を見ると鳴海が真っ赤な顔をして口に手を当てて軽く咳き込んでいるのが見えた。無理して笑いを堪えてるように僕には見える。

僕はこの時思った。鳴海愛はいつも無理してるんじゃないかって。ワザと人を寄せ付けないようにしたり、何があっても冷静でクールなフリをしているように今なら思える。

そんなことを考えていて、回りのことなどすっかり目に入ってなかった時に、横から声がかかって僕は少しドキッとした。

「春日先輩、聞いてましたか？」

「えっ、何を？」

どうやら、僕が考え事をしてた時に渚が何かをしゃべったらしい。「あたし、クラブ・ダブルBの噂を流したの誰かなと思って調べてみたんだけど……」

「私も誰だか何度も調べてみたが、毎回一人の女子生徒に行き着いた」

「じゃあ、その生徒に直接聞いてみたら？」

僕の発言を聞いた二人の表情は何とも言えない渋い表情だった。

「どうしたの二人とも？」

鳴海はいつも以上に機嫌の悪そうな顔して言った。

「彼女はもうすでに死んでいる」

二人が調べたつて言うんだから彼女が噂を広めた張本人であるとは思うけど、彼女が噂を最初に流した人物であるとは断定はできない。

結局何も掴めないのかと思った時、渚が手を上げた。

「はい、はい。え〜と、その女子生徒の名前は藤宮彩、三年生で最近思いつめた表情をよくしていて、授業中に保健室に行くことが多かったらしいですよ、それである日突然別人のように元気になってそれから クラブ・ダブルB の噂を流すようになったみたいです」

僕はピンと来た。

「つまり、藤宮彩は クラブ・ダブルB によって悩みを解消されたつて訳だね。それと、保健室によく行ってた言つてたよね？ この事件で最初に消えたのは保健室の水鏡紫影先生だ！」

僕が声を張り上げると鳴海愛は不適な笑みを浮かべた。

「そう、それに水鏡紫影はまだ死んでもいないし可笑しくなってもいない」

この言葉に渚が付け足した。

「だから、水鏡先生は警察の取り調べを何度も受けているらしいですよ」

生徒が多く姿を消して死亡したこの事件だが、最初の生徒が消える前に姿を消した学校関係者がいた。その人物こそが、事件ではじめに失踪した人物 水鏡紫影先生。

水鏡紫影は保健室の先生で、失踪したのちに帰ってきた。やはり、この先生の記憶もあやふやで事件について何も覚えていないらしいかった。

僕の中で事件の糸口が見えてきた。藤宮彩と水鏡紫影先生は クラブ・ダブルB と何らかの形で関わったに違いない、そして、水鏡紫影先生は今回の事件の鍵を握っているに違いないと。

渚はお弁当箱のフタを閉めてバッグの中に放り込むと、勢いよく立ち上がった。

「じゃあ、あたし水鏡先生について詳しく調べてきますね！」  
そう言って渚は元気に走って行った。

渚の姿が見えなくなった所で鳴海が遠い目をしてぼそりと呟いた。  
「……強いな渚は」

「どういうこと？」

「渚の友達は何人居なくなった。一人はもうすでに死んでいる、もう一人はこないだ帰って来たがいつ可笑しくなるとも限らない」  
「……………」

僕は言葉がみつからなくて……。なんだかみんな『フリ』をしてるだけなんだと思った。

「渚は人前では元気なフリをしているが、私だけの前だと大声を出して泣くんだ。渚の悩みや悲しさが痛いほど私の胸に突き刺さる」  
鳴海はすごく哀しそうな顔をしていた。

僕は何も言えず、鳴海の横顔をただずっと見つめいた。

昼休みが終わり、いつものように五時間目が終わり、六時間目は先生たちの臨時の職員会議とかで自習になった。そして、何時ものように学校が終わった。

帰りに先生が明日からしばらくの間学校が休みになることを告げ、生徒に早く帰るように促した。臨時の職員会議で急遽決まったらしいけど、なぜ学校が休みになるのかまでは説明はなかった。きつと事件が絡んでいるに違いないと僕は思わずにいられなかった。

今まで学校は消えた生徒たちとの関係を否定していた。たまたま学校の生徒が居なくなっただけで学校は無関係だと、だから大騒ぎになった後でも学校の授業は普通どおりに行われていた。でも、今回は何かがあったに違いない。

教室を出て行く生徒たちの顔はみんな不安で押し潰されそうな表情をしている。

そんなクラスメートの表情を見ると、鳴海が今まで僕が見た中で一番不機嫌そうで恐い顔をして僕に近づいて来た。

鳴海は僕の瞳を睨みながら、重たそうな口をゆっくりと開いた。

「……大変なことになったかもしれない」

「どうしたの？」

「渚のケータイに連絡がつかない」

普段の状況だったら、電源切つてるとか電波の届かない所にいるだけってことでそんなに気にもしないけど、今は状況が状況だけに不安が積もる。

鳴海が重たそうに口を開いた。

「それにもう一つ」

「……………」

僕は思わず唾を飲み込んだ。

「これは職員室を盗聴してわかつたんだが」

「盗聴!？」

声を張り上げてしまった僕に鳴海の激が飛ぶ。

「話を最後まで聞け！」

「う、うん」

「六時間目の職員会議を盗聴したんだが、どうやら水鏡紫影は被害者兼重要参考人から容疑者に変わったらしい。しかも、水鏡の行方が五時間目からわからない、そのため警察が血眼になって彼女を捜索しているみたいだ」

六時間目に鳴海を見た時、すごく厳しい表情をしてイヤホンを付けて音楽を聴いていると思つたら、まさかあれが盗聴をしていた何て夢にも思わなかった。それより何時の間に職員室なんか盗聴器なんて仕掛けたんだろう？

「とにかく、渚の教室に行ってみよう」

と僕が提案し、僕らは急いで渚の教室に足を運んだ。

渚の教室に着くと数人の女子生徒が深刻そうな顔をして話していた。その生徒たちは教室に入った僕らをいつせいにを見た。

そして、一人の女子生徒が僕の顔を見て言った。

「渚の知り合いの先輩ですよね？」

僕は思い出した、確かこの前にこの教室に来た時、渚と話していた友達だ。

「そうだけど」

僕がそう言うとその子は酷く不安そうな顔をして言った。

「渚が五時間目から居なくなっちゃって……」

その言葉を聞いた鳴海が間入れず大声で叫んだ。

「行くぞ涼！」

この時の鳴海は僕の見ただ中で一番感情的だった。

足早に教室を出て行く鳴海を僕は追いかけるようにして教室を後にした。

僕らは取り合えず、事件の鍵を握る水鏡紫影先生の自宅のマンションに行くことにした。だけど判り切っていたことだけど、水鏡先生は自宅には居なかった。

あきらめて帰ろうとした僕らがある男が呼び止めた。

「君たちちよつと話があるんだが」

男の風貌はスーツにネクタイの中年で少し疲れたような顔をしていたが、その瞳は獣が獲物を見据えるような鋭い目をしていた。

それに負けないぐらいの目で鳴海は男を見て言った。

「何者だ？」

男はそう言われるとスーツの内ポケットから警察手帳を出し僕らに見せ付けた。

「君たち水鏡紫影の居所の心当たりはないかい？」

「無い」

鳴海にそう言われた刑事は頭をポリポリとワザとらしく掻いた。

「そうか……。でも、事件の事を調べているなら『子供の出る幕じやない』」

と言ってニカつと口元が嫌な笑いを浮かべた。

鳴海は何も言わずに刑事の横を『擦り』抜けて行った。それを見た僕は刑事と目線をワザと合わせないようにして鳴海の後を追った。鳴海の表情はどんどん不機嫌さを増していき、マンションから出

て僕に話しかけた時の表情を見た僕は彼女に殺されるんじゃないか  
と思ったほどだった。

「涼にはこれから学校に行つて欲しい、全てはあそこで起こつてい  
る。私はこれから調べる事ができたから後は頼んだ」

そう言つて鳴海は僕の返事を待つ前に走つてどこかに行つてしま  
った。

行方不明になった生徒たちはみな、学校の中で行方不明になった  
と言われている。だから僕は思うんだ、今回の事件は学校を中心に  
蠢いているんじゃないかって。きつと、あそこに何かがある。

残された僕は鳴海に言われた通りに学校に行くことにした。

学校に着いた時にはもう夜の七時くらいで、いつもより早く校門  
は閉められて鍵が掛けられていた。

生徒も教師も今日は早く帰宅させられて、学校には人の気配がな  
かった。

僕は辺りに人が居ない事いちよう確認して正門をよじ登ろうとし  
た。だけど、運が悪かったのか僕は後ろから『おい!』と声をかけ  
られてしまった。

僕は驚き後ろを見ると、あの時の刑事が立っていた。

僕は完全にしまったと思った。

「何してるんだ、まさか学校に忍び込む気じゃないだろうな?」

「……………」

僕は何も言わなかった。こんな状況で言い訳しても無駄だと思っ  
た。

「家まで送つてやるから、こっち来い」

僕は刑事に連れられるままに車の助手席に乗せられ、無理やり自  
宅まで送り届けて貰った。

玄関で僕と刑事を出迎えた母親は驚いた顔をした。当たり前だ、  
息子が刑事に家まで送つて貰うなんて、何かあったと思うのが当然  
だから。

僕が何も言わずにいると、刑事が母親に向かって僕がこれ以上事件に首を突っ込まないようにと注意をして帰って行った。

僕はその後、母親に父親の前まで連れて行かれて二人にいろいろと注意された。

母親は頼むから危険なことはしないでと泣き落としをして、父親にはこつ酷く叱られた。そして、僕は学校がはじまるまでの間自宅から一歩も出ちゃいけないと自宅謹慎命令を出された。

僕はそんなことに従うつもりなんて微塵もなかった。当たり前だ、僕にはしなくちゃいけないことがある。

深夜になり両親が寝静まったのを見計らって僕は家から抜け出すことを決意した。これから僕は学校に行く。

自分の部屋から出て、音を立てないように階段を下りて、玄関のドアをゆっくりと開けて外に出た。

音をなるべく立てないように玄関の鍵を掛け終えた僕は走り学校に急いで向かった。

静かな闇の中を僕は走って学校に向かっていった。

深夜に学校に侵入して僕は何を調べようとしているのか、自分でもわからない。けれど、行かなきゃいけない。

僕は何かに呼ばれている。

学校についた僕は今度はフェンスを登って学校内に侵入した。

今度は運が良かったのか誰にも見つからずに学校に侵入することができた。だけど、問題はこれから校舎内にどうやって入るかだった。

どこかから校舎内に入ることができないかなと校舎の周りを歩いている僕の目にある人物の人影が飛び込んで来た。

水鏡紫影先生だ！

僕は水鏡先生に気付かれないようにこつそりと後を追った。すると、校舎の裏側に辿り着いた。

僕の心臓が激しく脈打つ。

水鏡先生は立ち止まり誰かを待っているようだった。そして、す

ぐに二つの人影がまるで闇の中から這い出したように水鏡先生の前に現れた。

二つの影は同じ形をしていて、徐々に月明かりに照らされて色が付いていく。

僕は相手に見つからないように物影から目を凝らして三人を見た。水鏡先生といる二人の人物は同じ格好をしていて、そして、異様だった。あのファントム・ローズといい勝負かもしれない。

真上から見ると、つばがひし形をした大きな帽子を被り、暗がりによくわからないけど恐らく色は白とクールブラウンを基調とした質素なドレス姿で首には鎖が巻き付けられ、手には銀色の金属の棒の先端に大きなリングが付いている杖のような物を持っている。そして、何よりも僕の目を引いたのは、目の部分に包帯のようにグルグル巻かれた布だった。

水鏡先生が謎の人物たちに何かを話しているけど、何を言っているのか良く聞き取れない。

「……捜査…女に…捕まるのも…だろう」

やっぱり何を言ってるのかわからなかったけど、水鏡先生が謎の人物の名前をはっきりこう呼んだのはわかった。

「ミラーズ」

僕はその言葉を聞いた瞬間には身体が動いていて、もう三人の人物の前に飛び出してしまっていた。

## ダブル「C a c e s ダブル」

僕が飛び出して来たのに驚いているようすの水鏡先生と ミラーズ の動きが止まってしまっていた。

いや、違った。僕が飛び出して来て驚いて止まっているんじゃない。

水鏡先生たち同様に『それ』に気付いた僕は動きを止めてしまった。

薔薇の香だった。僕ら全員の動きを止めさせたの風に乗って運ばれて来た薔薇の香…… 水鏡先生たちもこの香に何かを感じ取り動きを止めたに違いない。

あいつが現れるに違いない。

月明かりだけが照らす夜の闇の中、怖ろしく白い仮面は確かに笑っていた。間違いない、ファントム・ローズだ。

ファントム・ローズは僕と水鏡先生の前に立ち、 ミラーズ のことを見ているようだった。

ミラーズ の一人が月光を浴び、銀色に輝く杖を構えてファントム・ローズに襲い掛かった。

揺らめくファントム・ローズはどこからともなく一輪の赤薔薇を取り出すと、その匂いを嗅ぎ天に掲げた。

すると、ファントム・ローズの周りを無数の薔薇の花びらが竜巻のように舞い上がった。

美しくも荘厳な薔薇の花びらは ミラーズ に向かって降り注いだ。それはまるで血の雨のようで、薔薇の花びらは刃となり、ミラーズ の身体を容赦なく切り裂く。

激しく舞い散る紅に彩られた ミラーズ は地面に倒れ、そこにファントム・ローズは空かさず白薔薇をダーツのように投げつけた。薔薇の花を突き刺された ミラーズ は口元を酷く苦痛に歪ませ、人の声とは思えぬほどの呻き声を張り上げた。すると、白かった薔

薔薇の花が見る見るうちに紅く染まり、それと同時に ミラーズの身体が枯れ木のように萎んでいき、衣服だけがその場に残され、その衣服さえも最期には砂になって舞い散った。

ファントム・ローズは ミラーズ の居た場所に残された一輪の真つ赤に染まった薔薇の花を拾い上げ匂いを嗅ぎ言った。

「やはり、人の血の匂いではないな」

僕は幻のような出来事を目の当たりにして、頭が真つ白になりかけた。でも、今ここで起きていることを見逃す訳にはいかない、事件の手がかりが目と鼻の先にあるのだから。

水鏡先生が大声で叫んだ。

「世界の調和を望まないファントム・ローズを殺してしまいなさい！」

僕が水鏡先生のいる方向を振り向くと、そこには六人の ミラーズ がいつの間にか集まっていた。

一人のミラーズを水鏡先生の横に残し、残り五人のミラーズが月光を浴び薔薇の匂いを嗅ぎながらたたずんでいるファントム・ローズに襲い掛かる。

ファントム・ローズは動こうとしない。そして、ミラーズたちがいつせいに杖を振り上げて飛び掛かるうとした時、薔薇を持つファントム・ローズの手がスナップを効かせるように動かされ、薔薇の花が鞭のようになり、撓り、蛇のようにうねった。

鞭へと変化した薔薇の花が月下のもとで華麗に舞うファントム・ローズともに ミラーズ たちを打ちのめす。

弱まった ミラーズ に止めを刺すべく、五本の白薔薇が天に舞い上がり、槍の雨と化して ミラーズ の身体を貫いた。

薔薇は紅く染まり、 ミラーズ の身体は先ほどと同様に萎んでいき、衣服は砂と貸して消えて逝った。

白い仮面が不適な笑みを浮かべる。

「世界のバランスを崩そうとしているのは、お前たちではないのか？」

手に持った薔薇をファントム・ローズは水鏡先生に付きつけた。しかし、水鏡先生は全く動じるようすを見せず、声を張り上げながら反論した。

「全ての人々の魂を一つの存在として、世界を一つのモノとして統合させるのよ。それこそが完璧な調和。悩みを持つ人々は他者と溶け合い、他人を知り、全てを知る。全てを知っているモノが悩むことなんてないでしょう?」

「人の悩みを強制的に他者が解決して何の意味がある? 世界は一人一人に与えられている。自分の世界は自分自身が管理するべきなのではないか?」

水鏡先生がファントム・ローズの言葉を聞いてせせら笑った。

「そういうあなたこそ、その坊やの世界に首を突っ込み過ぎているんじゃないの?」

「私は迷える仔羊にきつかけを与えてるに過ぎない、最終的な判断は彼の決めることだ」

僕には二人が何を言っているのかさっぱり理解できなかった。

魂や世界を一つにするとか、水鏡先生はいつたい何をしようとしているのだろうか?

水鏡先生が残った一人の ミラーズ にファントム・ローズに襲い掛かるように命じて、その隙に彼女は闇の中へと逃げて行く。

ファントム・ローズは襲い掛かって来た ミラーズ を軽くあしらい地面に叩きつけると、急いで水鏡先生の後を追って闇の中へと姿を消してしまった。

残された僕は動かずに地面に倒れこんでいる ミラーズ に近づいた。

ミラーズ とはいったい何者なんだろうか?

奇妙な服装と、そして何よりも僕が気になっていたのは目に巻かれている布だ。

ミラーズ の素顔を見てやろうと思った僕は、ミラーズの顔の横にしゃがみ込み、巻かれている布を取ろうとした。

布に恐る恐る触れようとしている僕の手が震える。そして、布に手を掛けたもののきつく巻かれていてなかなか取れない、仕方なく僕は力いっぱい強引に外した。

ミラーズ の素顔が露わになり、それを見た僕は愕然となり言葉を失った。

息を呑んだ。

信じられなかった。僕の目の前で死んだはずの椎名アスカの顔がそこにはあった。

目を閉じて無表情で気を失っているかと思っていた ミラーズ が、突然目をかっと見開き不適な笑みを浮かべた。

僕はその瞬間、頭を殴られたような激痛を覚え、その場で気を失ってしまった。

薄明かりの中で頭をふらつかせながら僕は意識を取り戻した。

手足が動かない。僕の口と手足は縛られていて、身体の自由は奪われてしまっていた。

部屋の明かりは数十本の蠟燭だけで薄暗く、部屋の大きさ、ましてやここがどこなのかなど検討もつかなかった。そもそもここはまだ学校内なのだろうか？

僕がそんなことを考えていると、目の前の闇から大勢の ミラーズ たちが浮かび上がってくるように現れた。そして、最後に水鏡先生が姿を現し、僕に向かって微笑んだ。

闇の奥から人を抱きかかえた ミラーズ が二人現れた。

一人目の ミラーズ が抱えているのは僕と同じ学校に通う三年生の先輩だ。委員会が同じで世話になった記憶がある。

そして、もうひとりの ミラーズ が抱きかかえていたのは、椎風渚だった！

やっぱり彼女はこいつらにさらわれていたんだ。

二人を抱きかかえた ミラーズ たちが僕の前を通り過ぎて行く。その ミラーズ の進む道の両脇には蠟燭が順々に灯って道を示し

ていく。

そして、二人の ミラーズ の足が止まると同時に、眩い光を放ちながら人の全身を映せる大きさの古めかしい鏡が現れた。

三年の先輩を抱きかかえていた ミラーズ が、先輩を鏡の前に降ろして鏡から離れると、先輩の身体がまるで糸で操られるような動きで立ち上がった。

最初は真っ黒で何も映し出されなかった鏡に徐々に先輩の全身が映し出されていく。

鏡を見ていた僕は何か不自然な感覚に襲われた。……あの鏡、逆さに映ってない！

鏡は普通、物が逆さに映るはずだ。でも、あの鏡は違った。

鏡がカメラのフラッシュのような光を放つたと同時に先輩の身体が糸を切られた操り人形のように地面にばたんと倒れた。

だけど、鏡に映った先輩の姿は立ったままだ。

そして、何よりも僕を驚かせたことは、この後に起こった。

鏡の内に潜む人影が自ら意思で動き、鏡の表面が水面「ミナモ」のように揺れる。

手が出た、足が出た。鏡の内から人が這い出して来る。

何が起こったのか全くわからないで驚いている僕は、いつの間にか近づいて来た水鏡先生に声を掛けられてまた驚いた。

「何をしたかわかったかしら？」

「……………」

口を縛られている僕は無言で首を横に振った。

「あの 鏡 は私が偶然、学校の地下室で見つけた物なのよ。私は鏡 に言われたの、一緒に悩みのない世界をつろうって」

水鏡先生は僕の口に縛られていた布を取ってくれた。

しゃべるようになった僕はすぐに水鏡先生に質問をした。

「あの鏡がしゃべったって、どういうことですか!？」

「あの 鏡 が何だかは詳しく知らないけれど、あの 鏡 意志を持っているのよ。そして、私と同じ夢を抱いていた」

「『悩みのない世界をつくる』ですか？」

水鏡先生は小さく頷いた。

「そう、私は保健室で多くの学生たちの悩みや相談を受けたわ。その悩みを解決させてあげたかった。そして私はあの 鏡 に出会ったの」

「悩みを解決させるってどうやって。それにどうして生徒たちをさ  
らったんですか？」

「あの 鏡 は悩みや不安をエネルギー源としていて、そういった人々の魂を体内に吸収し、一つのものにする能力を持っているの。そこで私は藤宮彩という保健室によく悩みを抱えて訪れていた生徒にある噂を教えて、クラブ・ダブルB を彼女に探させると同時にいろんな生徒に噂を流してもらい、悩みを持った生徒を探したのよ。そして、他の者に気付かれぬようにして悩みを持った生徒に近づき、 鏡 の元へ連れて行った」

「僕の頭は完全に混乱している。そんな僕が言えたのはこんなことくらいだった。」

「あ、アスカは、死んだはずのアスカに会いました。どういうことですか？」

「今見たでしょう、 鏡 の力を？」

「今？」

「 鏡 は映し出した人の肉体と魂を複製することができるのよ。複製された人間は ミラーズ となり、その ミラーズ からまた複製された人間が家に返されるのよ。でも、複製を繰り返したモノはあまり長持ちをしないのよ、そのためすぐに壊れてしまい精神異常をきたしてしまう、それが難点だったわね。でも、時間稼ぎができればそれでよかったのよ」

鏡には内面までは完璧に映し出せないということなのかもしれないと僕は思った。だから複製するたびに出来が悪くなるんだと。

渚を抱えていた ミラーズ が渚のことを鏡の前に降ろした。それを見た僕の頭に疑問が次から次へと沸いてくる。

「複製された、最初の本人はどうなるんですか？」

「本人は最初の複製の時に、鏡よって魂を抜かれ、魂は鏡の中に吸い込まれて、魂同士が混ぜ合わされて一つのモノになるの。全ての人間が一個の個体として存在する、そして悩みは全て解消されるわ」

「あ、あの、肉体はどうなるんですか？」

「肉体はもう不要でしょ？」

「じゃあ元には戻れないってことですか！」

僕は大声を出した。

「元に戻る？ どうして？」

僕は水鏡先生の言葉に愕然とさせられた。魂は混ぜ合わされて、肉体はもうないということなんだと思う。つまり、生徒たちは……アスカはもう帰って来ないってことなんだと思った。

渚の身体が糸で操られるように立ち上がった。ダメだ、どうにかして止めさせないと渚まで……。

僕は大声で叫んだ。

「止める！ 今すぐ止めるんだ！」

水鏡先生は僕に向かって微笑みこう言った。

「あなたも一緒になれば、そんな些細な事気にしなくなるわ。さあ、あなたも一緒になりましょう」

「イヤだーっ！」

僕が大声で叫んだと同時に辺りを照らしていた蝋燭の火が全て消え、辺りが暗闇に包まれたかと思うと、僕の鼻を薔薇の香りが衝いた。

闇の中で激しく『何か』が割れる音がして、大勢の悲鳴があがった。

僕は頭がクラクラして意識が朦朧となり、そのまま気を失ってしまった。

僕が目を覚ましたの自宅のベッドの上だった。

時計の針は朝の七時半を指していて、カレンダーに目をやると今日からまた学校がはじまる日にちだった。

僕は学校に行く気など全くっていうほどしなかったけど、いろいろなのが気になって仕方なく学校に行くことにした。

学校はいつも通りだった。クラスに入ってもなんら変わった雰囲気もない。

……いや、何かが違う。この前まで休んでいた生徒たちが登校している。事件で登校を控えていた生徒が登校している。

鳴海愛と話がしたかったけど、彼女は学校に来ていないようだった。だから、僕はすぐに椎風渚の教室に向かった。

渚は教室にいた。

教室で楽しそうに友達と話していた渚だったけど、僕に気づくとすぐに僕に駆け寄って来て、そのまま僕の手を引いて、普段生徒たちには余り使われることのない学校の隅の方にある階段の前まで引っ張っていかれた。

そこで渚が顔を少し膨らませて、僕のことを上目遣いで睨んだ。

「涼だったら、あんまりあたしの教室に顔出さないでって言うてるでしょ?」

「えっ、な、何が」

突然変なことを言われて僕は戸惑った。

「あたしたちが付き合ってるの、一様周りには内緒なんだからあゝ」  
「えっ、僕らが付き合ってるだって!？」

「ひつどあゝい。とぼけちゃって、もしかして、好きなひとができてあたしと別れたいとか?」

「そ、そうじゃなくて……あの」

何が何だかわからない、僕が渚と付き合ってるなんてどういふことなんだ?

「涼の方からコクってわたしたち付き合ってたんだよあ」

渚は今にも泣きそうな瞳で僕のことを見ている。

でも、僕は渚と付き合った記憶なんてない。……いや、待てよ。

「僕たちさあ、屋上で出合って、一緒に昼飯食べるようになって、それで一緒に帰るようになって、学校の帰り道で僕が渚に告白して……それで……」

「そうだよ、涼があたしのこと『好きだ』って言って、そのまま抱きしめたんじゃない！」

「そう、そうだった。……いや、違う、そんな記憶なんてない。……やっぱりある、でもない。」

僕は混乱する頭のまま、あの事件について話を聞いた。

「ミラーズは、クラブ・ダブルBは、消えた生徒たちは？」

「いきなり何の話してるの、マンガかアニメの話？ そうやって話をすり変えるつもり？」

「そ、そうじゃなくて、事件はどうなったの、だって渚はさらわれて、いや、だって、僕らは鳴海さんと一緒に事件を追って……」

そして、予期せぬ不思議な答えが返ってきてしまった。

「鳴海さんって誰？」

この言葉を聞いた僕は血の気が引いてぞっとした。

「鳴海愛だよ、渚の家に住んでる僕と同じクラスの」

「隣りに？ ……そんな人いないけど？」

もう、僕には何が何だかわからなかった。

「大丈夫？ 涼の顔真つ青だよ、保健室に行った方がいいんじゃない？」

「そうだ、保健室だ、水鏡先生はどうなったんだ？」

でも、保健室に行くのが恐かった。何か嫌な感じする。正直もう家に帰りたいかった。

「ねえ涼ったら、だいじょぶなの？」

「あ、う、うん」

その時、学校のはじまりを告げるチャイムが廊下に鳴り響いた。

「あ、朝のホームルームはじまっちゃうよお、早く行かないと遅刻にされちゃう。ほら、涼も急いで……」

「そ、そうだね」

僕と渚はいつしよに走って、それぞれの教室へと急いだ。教室に戻った僕はまた鳴海愛を探したが、どこにもいない。今日は休みなのかもしれないけど、僕はもつと嫌な予感がしていた。

鳴海愛の席がない。ないというか、別の人が座っているという方が正しいかもしれない。クラスから生徒の席が一人分消えてしまっていた。

一時間が終わり僕はすぐに友達たちに事件のことを聞いて見たけど、クラブ・ダブルB、ミラーズって何？と言われてしまった。消えてしまった生徒の名前も出してみたがそんな人学校にいたっけ？と言われてしまった。

僕はその後もいろいろな人に話を聞いたけど誰も事件について知っている人はいなかった。そう、まるでそんな事件なんて最初からなかったように……。

消えた人たちは最初から存在していなかったことになっていた。そう言えば最初から居なかったような気がしないでもない。でも、居たという記憶もある。

昼休みになり僕は意を決して保健室へと足を運んだ。

そこにいたのは水鏡先生とは違う女の先生だった。でも、僕はその先先のことを知っているけど、知らない。

最初からいたような気がする。この保健室の先生との過去の記憶が確かに頭の中にはある。だけど、知らない。……知っているけど、知らない。

僕はその後の授業など一つも身に入らなかった。今日一日中こんな感じだった。

そして、混乱した頭のまま家路についた。家に帰る途中、生物の気配が一気にすうーっと消えていき、薔薇の香がした。そして、あのファントム・ローズがまたも僕の前に姿を現した。

白い仮面は『無表情』だった。

「失われた魂は、もう決して元に戻ることはない。だから、世界はこういう形を取らざるを得なかった」

つまり、事件に関することを全てが存在しなかったことにしたのだと。

だけど、僕の記憶の中には今の世界の記憶と前の世界の記憶が一緒に存在してしまっている。なんで、そんなことになっているんだろう？

ファントム・ローズは言った。

「世界は本来、一人一人に与えられているのが原則だ。だけど、君は世界から弾かれた」

僕にはファントム・ローズが何を言っているのか全くわからなかった。

「意味がわからない、僕の恋人のアスカはどうなったんだ？」

「君の恋人は椎風渚だろ？」

そう僕の恋人は椎風渚だ……でも。

「……でも、違う！」

「椎名アスカなんて人間は最初から存在しなかった。涼、君は私と同じように世界から弾かれてしまったんだ。自分の世界を持たず、人の世界に生きる者、そういう存在なんだ」

ファントム・ローズの『仮面』は酷く哀しそうな顔をした。

「私にはこうなることがわかっていて。けれど君ならばこの呪縛から逃れられるのではないかとも思っていた。しかし、結局君は世界から弾かれた」

そして、ファントム・ローズは渦を巻く多量の薔薇の花びらに囲まれ姿を消した。

大量の薔薇の花びらは風に煽られ、天を舞い、世界を薔薇の香で満たした。

僕は目を瞑りその場を動くことができなかった……。

終わり方は人それぞれだと思う。

でも、僕はこの終わり方には納得していない。  
消えた人は結局帰ってこなかった。  
いや、居なかったことになってしまった。  
全てが幻のようだ。今僕が生きている世界さえも……。

END

## 八ザマ「Another 1 渚」

世界分裂化現象。

『弾かれたモノ』である春日涼は『世界を渡るモノ』であるという。

そんな感じで、あたしの前に現れた青年は説明した。

あたしにはなにがなんだかわからなかった。

涼の様子はたしかに可笑しかったけど、それが失踪の前触れだなんて思いもしなかった。

ある日、涼はあたしにこんなことを言った。

君はアスカの代わりなんだ。って……。

それを聞いたあたしは涼に一方的に怒りをぶつけたけど、涼は老衰したみたいは何も言わずにいた。

涼が失踪したのはその後すぐだった。

最初はあたしのせいかと思ったけど、もしかしたら違う原因があるかも思いはじめたのは、冷静になってきた最近のこと。

そんなときに彼はあたしの前に現れた。

名前は影山彪斗「カゲヤマアヤト」。あたしより3つも年上らしい。だから19歳ね。

彪斗はあたしの前に突然現れ『春日涼について知りたいことがある』っていきなり言われたの。涼のことを知りたいのこっちだよって思った。

それで近くの喫茶店に入ることにしたんだけど、この彪斗ってひと、そーとーキテるよ。

あたしものね、こういう話キライじゃないけど、現実とアニメとの区別くらいできる。可笑的いよこの人。

「あたしもう帰る」

こんな人と付き合ってらんない。まあ、カフェオレおごってもらったけど。

「まだ話は終わってないよ渚さん」

席を立てて帰ろうとしていたあたしは思わず足を止めてしまった。  
「名前言ったっけ？」

そのときは名前を呼ばただけで足を止めちゃったけど、涼のこ  
と聞きたいってあたしのどこに来たんだから、あたしの名前くらい  
知ってて当然だよな。

でもね、彪斗はこんなことを言ったの。

「アスカ、ファントム・ローズ、ミラーズどれかに聞き覚えは？」

それは全部、涼が失踪する前に口にしてた言葉だった。彪斗が  
なにか知っているのは間違いないと思ったの。だからあたしはまた  
席に戻った。

「君はアスカの代わりなんだって涼に言われた。涼の本当の恋人は  
あたしじゃなくて、アスカなんだって。アスカっていったい誰なの  
？」

「椎名アスカはすでにミラーズになって世界から抹消されてしまっ  
たよ」

「世界から抹消って、殺されたってこと？」

「なんだかすごい話になってきたみたい。」

「殺されたんじゃない。実験体にされて……いや、やめよう。説明  
だけでは実感できないものもある」

「それってあたしばかりしてるの？」

「違うさ、知らないことは理解できない。椎名アスカは死んだよう  
なものと考えてくれていい。しかし、春日涼は椎名アスカを蘇らせ  
ようとしている。それが要約さ」

「死んだ人を蘇らす？」

そんなゲームとかじゃないんだし。でも、あたしを見つめる彪斗  
の瞳は嘘を言っていない。かなり大真面目。

「僕がさっき説明したことを覚えているかい？」

「どの話？」

「世界は人の数だけあり、分裂を続けている。それを世界分裂化現

象という」

「うん」

「しかし、世界はもともとひとつだった。いや、この話もよそう。つまり、3人の人間にたいして、2つしか世界がなければ、1人は余ってしまう。その余りになってしまったのが春日涼さ」

なにがいたいんだか、ぜんぜんわかんない。

この人の説明って順序だつてないし、言ってることも意味不明。だから、あたしは一番聞きたいことを考えて質問を投げつけることにした。

「涼はどこにいるの？」

「それは最初に言ったはずだ」

「聞いてない」

「そうか、すまない。記憶障害なんだ。弾かれた春日涼には自分の世界がない。だから人の世界を渡り歩く。世界のどれかに春日涼はいる」

また意味不明な話がはじまった。

こうなったら、こつちだつて要点だけ言つてやる。

「涼はあたしが自分で探すから、あなたの知ってる手がかり全部話して」

「君はもうこの件から手を引いたほうがいい……といたいところだが、君はすでに世界剥離がはじまってしまっている」

「だーかーらー、あなたの言ってること全部意味不明！」

もういい。こんな人と話してられない。

あたしは席を立ち上がって帰ろうとした。

帰ろうとする彪斗に腕を掴まれ、世界が揺れたような気がした。

地震じゃなくて、世界そのものが歪んで揺れた。

驚いているあたしから彪斗はすぐに手を離れた。

「すまない、君の世界剥離を早めてしまった」

「世界剥離って……」

「君も世界から弾かれた存在になる」

「意味わかんない」

「春日涼や私と同じ存在になる」

わかないことばかり。わかんなさすぎて、なにを質問すればいいのかもわかんない。

「同じってなに？ 同じなったら涼に会えるの？」

「見つけ出すことができれば会える。今の君では、春日涼が君の世界に侵入して来ない限り会えない」

「だから世界剥離すればこっちから涼を探しにいけるってこと？」

「僕は春日涼の行方を捜している。僕らの仲間になるかい？」

「なれば涼に会える？」

「探し出せば」

「だったら仲間になる！」

「君が世界剥離したら会おう」

消えた。

人間が忽然と消えた。

あたしの目の前から彪斗が消えてしまった。

周りの人たちは人が消失したというのに、誰も驚いていない。

まるで最初から、そんなことなかった。影山彪斗なんて人物そこにいなかったように周りの時間が流れている。

でも、あたしの前には彼の飲んでいたコーヒーカップが置いてある。それが彼のいた証拠だ。

あたしは近くの席にいた人に尋ねてみた。

「あたしの前に座って人、消えましたよね？」

相手は不思議そうな顔をしている。まるであたしが頭可笑しくなつたみたい。

そんなはずない。だって、コーヒーカップがそこにあるのに……。

あたしのカフェオレと彪斗のコーヒーを運んできたウェイトレスが通りかかったので、あたしはすぐに腕をつかんで呼び止めた。

「さっきコーヒーを運んでもらったとき、あたしの前に男の人が座ってましたよね？ コーヒー頼んだ男の人？」

ウェイトレスはあたしのことを不思議そうな顔をして見つめてい  
る。

「コーヒーはお客様が注文なされたものですが？」

「あたしが頼んだのカフェオレで、コーヒーを頼んだのはあたしの  
前に……」

駄目だ。本当に頭が可笑しくなってきた。

頭が可笑しいのはあたし？

それとも周り？

ファミレスからの帰り道、あたしは頭が割れそうに死にそうだっ  
た。

本当はもう死んでるかも。

なんだか自分がいる現実の世界じゃないみたい。

世界が歪んで見える。

道路が波打ってる。

……もう駄目。

あたしはアスファルトの上に寝そべった。

世界がグルグル回る。

空が回ってる。

空が青から急激に赤に変わった。燃えていような赤。

薔薇の花びら。

真っ赤な空よりも赤い薔薇の花びらが、ゆらゆら落ちてくる。

鼻を突く薔薇の香り。

「私のせいだ……すまない」

男の子の声？

女の人の声かもしれない。

白い仮面があたしを空から覗き込んでいる。

「あなた誰？」

「ファントム・ローズ」

涼が口走ってた名前だ。

「あなたのこと涼から聞いたことある」

「そう、私は涼を救うことができた。しかし、それをしなかったがために、君までも世界から弾かれてしまった」

また弾かれただって……それって共通語なわけ？

ファントム・ローズが差し出した手に掴まって、あたしはゆっくりと立ち上がった。

白い仮面があたしの顔に近づいた。

「君はすでに現実剥離してしまった」

またそのことば。

「現実剥離ってなに？」

「例えば、自分の家を失い、路上または人の家に住んでいる状態。ただし、無断でという意味だ」

「だんだん読み込めてきた……」

けど、現実だとは思えない。まるで夢の中にいる気分。

そういえば、周りに人の気配がしない。生活の雰囲気がない。夢の中にいるのかもしれない。

けど、それをファントム・ローズは否定する。

「夢はここよりも現実的だ」

「ここはどこ？」

「世界の狭間。人が住んでいる家と家の間とでもいえばいいだろうか」

……あれ？

急にあたしは恐ろしい震えに駆り立てられた。

「あたしの名前なんだっけ？」

それだけじゃない。他のことも……ママとパパの名前も……。

「あたしは？」

「思い出すんだ。思い出せなければ、君は世界から消える」

消えるって死ぬってこと？

いやだ……死にたくない……けど、思い出せないよ。

夕焼けが急に星空に変わって、夜の澄んだ空気に男の声が響き渡

る。

「君の名前は椎風渚。椎名アスカの代わりだよ」

道路に向こうであたしたちと向かい合うように立っている人影。黒い服を着て、顔には仮面　ファントム・ローズに似てる。

そして、あたしはあの声を聞いたことがあるような気がする。

ファントム・ローズの無機質な仮面が哀しそうな表情をした。

「ファントム・メア」

呟くファントム・ローズの言葉にファントム・メアが深く頷く。

「そう、ファントム・メア……それが世界から弾かれた僕の仮初の名。自分自身ただは自分が証明できないだなんて、ばかげてると思わないかい？」

「だから、私たちはファントムなのだ。世界は全ての者に平等に与えられている。個人の持つ世界が己を証明してくれる。しかし、自己の世界から弾かれてしまったては、他に自己を証明してもらわなければ、消えてしまう。自分自身がここにいるとを感じるだけでは、想いが弱すぎる」

「すでに僕たちは顔を持たない」

「だから私たちはファントム」

「けどさ、僕には君の真の顔が見えるよ」

ファントム・メアは少し間を空けて言葉を続けた。

「　　鳴海愛」

そして、ファントム・ローズも言葉を続けた。

「私には君が春日涼に見える」

このとき、あたしにも見えてしまった。

二人の仮面がヒトの顔に見えた。

よく知ってる二人の人物。

「涼、愛ちゃん！」

二人ともあたしを見て微笑んだ。

あたしは自分の名前も思い出し、あたしが涼の恋人じゃないことにも気づいてしまった。

学校で怪奇事件がはじまりだった。

涼があたしの腕を掴もうとしたとき、鞭が飛んで涼の手を弾いた。鞭を放ったのは愛ちゃんだった。

「どうして？」

なにがなんだかわからない。

仮面の二人があたしの知り合いで、愛ちゃんがどうして涼のことを？

愛ちゃんが素早く動き、あたしの身体を抱きかかえた。

「ファントム・メア……なぜ君は渚を狙う？」

「推測はできるだろ？」

「椎名アスカに関係があるのか？」

「アスカの復活には渚が鍵を握ってるからね」

愛ちゃんはあたしを背中に回し、涼に向かって襲い掛かった。

なんで二人が争ってるの？

二人になにがあつたの？

わけわかんないよ。

「ひゃっ!？」

急にあたしの身体が後ろに引つ張られた。

後ろからお腹を抱きかかえられてる。

いったい誰？

愛ちゃんの手があたしに伸ばされる。

けど、愛ちゃんの背後に涼が……。

消えた？

それだけじゃない。

夕焼け？

さつきまで夜だったのに、また昼間に戻ってる。

後ろに気配がする。

「誰？」

「俺だよ、影山彪斗。世界剥離したらまた会う約束だっただろっ？」

それはそうだけど、涼と愛ちゃんはどこに行ったの？

「なにがあつたの？」

「メアとローズはまだ 狭間 で戦っている。ここは現実だ。君は世界剥離をして、自分を失わずに耐えた」

あのまま自分の名前も全部忘れていたら、あたしはどうなつてたんだらう？

彪斗があたしの手を握った。

「なにをするの？」

「ここは俺の世界じゃないから、うまく魔法が使えないんだ」

「魔法？」

「俺は魔術師なのさ」

次の瞬間、あたしは誰の部屋にいた。

「俺の部屋にようこそ、椎風渚さん」

俺に部屋つて、また別の場所に一瞬で来たの？

なんだかなんでもアリつて感じ。

あたしはベッドの上に腰掛けて部屋を見回した。

本棚に分厚い本が入ってるほかは、綺麗さっぱりなにもない部屋。

寝るときに使ってるだけつて感じの部屋。

「渚さんの部屋はどこがいいかな？」

「えっ？」

「君はもう自分の家に帰らないほうがいい」

「どうして!」

「君はすでに世界から弾かれています。君に帰る場所はないんだよ。

それに俺の傍にいたほうがいい」

大きな事件に巻き込まれてしまったことはわかってる。

いろいろなものも失ってしまったような気がする。

「あたしの失ったモノ……取り戻せる？」

「なんとも言えないな。ただ……」

「ただ？」

「春日涼は僕らの敵だ」

ファントム・ローズ

あたしはいつたこれからなにを……？

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0189e/>

---

ファントム・ローズ

2009年3月24日08時48分発行